

## 中国観照 (第三回)

胡傑監督が民間ドキュメンタリー映画の可能性を語る  
林昭と『星火』グループについて

矢吹晋 (二世紀中国総研ディレクター)

連休前夜の二〇一五年四月三〇日(木曜) 私のメールに香港『明報』から毎日届く「明報専訊」の短い記事が含まれていた。「数十の民衆が林昭を祭り、連行された」という記事だ。曰く、「内地の数十名の民衆が江蘇省蘇州で北京大学の才女林昭を供養しようとしたところ、当地の警察に囲まれ妨害され、少なからぬ者が連行され、取り調べを受けた。昨二九日は林昭が銃殺された四七回目の記念日であった。林昭は一九五七年の反右派運動において右派分子に区分され、その後詩作を発表し現実の政治に不満を表明したことで投獄され、一九六八年に処刑された。内地の少なからぬ人々は、強権に反抗し自由を追求する象徴として、毎年その墓前で供養している」。中国語で一六〇文字程度の短いニュースだが、いくつかの往時を想起した。

私は一九八九年一〇月に講談社現代新書の一冊として『文化大革命』という小さな本を書いた。「結びに代えて——文革の亡霊」中の「文革の狂気」と題した一節でこう記した。「なかでも極め付きは林昭という女性の場合である。彼女は上海の監獄に投獄されていたが、自己批判を拒み、六八年四月二九日、

銃殺された。そして五月一日早朝、老いた母親のもとに、処刑の請求書が届いた。「反革命分子のために銃弾を一発用いたの  
で、家族は一発分の代金〇〇五元を支払うべし」(『沈思』二巻、三三一頁)。ここにも文革の狂気が凝縮されているように思われる」(二〇二頁)。

これを書いた四五年前には、私は林昭についてほとんど知らなかったが、今年になって専修大学土屋昌明教授を通じて、大量の林昭情報に接して、よみがえる林昭を実感していたところへ四七周忌の短信が届いたわけだ。

この機会に林昭問題を考えてみたい。今年の三月一四日夜、私は土屋さんの案内を受けて神田の専修大学に出かけ、胡傑監督『星火』を見て、解説を聞いた。その後、土屋さんから届いた胡傑監督「林昭の魂を探して」のDVDを見た。さらに、艾曉明教授(元中山大学)の林昭論二篇(「一四万言書」「靈耦絮語」)を読んだ。

テーマは中国現代史の核心にかかわる広がりをもつ。どこから考えるか。やはり、土屋さんの作った年表(一部土屋教授の推測を含む)をもとに、事柄の因果関係や経緯を見ていこう。すなわち、いわゆる右派分子から見た、反右派闘争から文革、そしてポスト毛沢東期までのクロノロジーである。

## I. 反右派闘争期

一九五六年五月二六日、陸定一中共中央宣伝部長が「百花齊放・百家争鳴」を呼びかける。一九五七年二月二七日、毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」。一九五七年四月二七日、中共中央「整風運動に関する指示」。一九五七年五月一九日、北京大学で学生の民主化運動、雑誌「広場」を発刊。一九五七年六月八日、毛沢東「力を結集して右派分子の気ちがいをいじめた攻撃に反撃を加えよう」。この後、反右派闘争が展開され、「蘭州大学では一九五名が右派とされたが、これは全校の人数の一四%にあたり、そのうち学生は一四三名だった」。一九五八年、蘭州大学の右派学生たちが天水と武山で労働改造にあたらせられる。

## II. 大躍進運動・調整期

一九五八年五月五、二三日、中共第八回党大会第二次会議。大躍進を肯定、毛沢東が社会主義総路線を提示、一〇月までに人民公社化が全国で実現（三面紅旗）。一九五九年五月、張春元、顧雁、胡嘖愚、孫和が天水の馬跑泉公社で地下組織の結成を相談、農民暴動あるいは政変惹起の可能性を話し合う。顧雁は刊行物「星火」を提案。一九五九年一〇月、向承鑑が華北に出張、各地で餓死者を目撃、兄と議論。一九六〇年一月、「星火」第一号出来。一九六〇年二月、鄧得銀が四川の餓死者の悲惨な状況を「星火」メンバーに知らせる。一九六〇年三月、この頃、

武山県だけで一万人以上の餓死者が出ていると杜映華らが認識。一九六〇年四月、顧雁、張春元、苗慶久が上海南陸瓦硝公社黒橋の顧雁のところに集まり、「星火」を中共の最高指導層に発送することを議す。また張春元の「論人民公社」ができたなら、印刷して全国の公社書記以上の幹部に配布することを議す。この頃、蘭州大学歴史系の右派学生で張春元の同窓生が甘肅の公安に、「張春元、譚蟬雪、孫和らの行動が疑わしい」と密告する。一九六〇年五月二日、「星火」グループと同じ右派学生二名が武山県公安局に張春元、譚蟬雪、孫和、向承襲、苗慶久ら一五名が反革命組織を作っていると密告する。この後、香港の人士の協力を得ようと、親戚を香港にもつ譚蟬雪が広州から香港に密航を企図、深圳で捕まって広東省開平で労働教育となる。

一九六〇年七月、張春元は譚蟬雪の救出をはかり、身分証明書を偽造して開平に入る。偽造が発覚して捕まった後、八月一〇日に脱走。張春元は向承鑑に電話、「母親が伝染病にかかった」。一九六〇年九月三〇日、向承鑑・杜映華ら武山のメンバーが一斉検挙される。一九六一年九月六日、張春元が逮捕される。一九六四年、天水の監獄にいた杜映華は、刑期満了を控えながら、同じ監獄にいた張春元（か？）にメモを渡して出獄後について相談、張春元は毛沢東とマルクスを読んで中国の現実に対処する学習をするように返信。このメモが発見され、杜映華と張春元は後に再審で死刑とされる。一九六五年一月、天水グ

ランドで張春元、譚蟬雪らに対する「万人宣判大会」が開かれる。

### Ⅲ. 文化大革命期

一九六八年、上海の監獄にいた林昭が処刑される。一九七〇年、張春元と杜映華が処刑される。

一九七三年、譚蟬雪が出所して酒泉で労働教育となる。

### Ⅳ. ポスト毛沢東期

一九七九年、「星火」関係者は「中共中央五五号文件」によって名誉回復を申請したが、天水裁判所は審査後に原判決のままとした（再審者は原判決をした当事者だったという）。後に、甘肅省の高等裁判所が再審チームを作って検討後、ようやく名誉回復を得た。

### 胡傑監督について

一九五八年、中国山東省済南市生まれ、二〇二二年三月までに二六作のドキュメンタリーを作っている。そのすべては、クライアントやプロデューサーがいない「自費自作」であり、正規の流通ルートにのせない「インディペンデント・ドキュメンタリー（中文Ⅱ独立記録片）」である。土屋が胡傑監督の活動に注目するに至った経緯は、土屋昌明編著『目撃！文化大革命——映画『夜明けの国』を読み解く』（太田出版）に書かれている。

胡傑監督作品の一つに、『私が死んでも』がある。これは、

一九六六年八月に紅衛兵に殺害された、北京師範大学附属高校の党総書記で副校長だった卞仲耘女史の境遇を扱っている。これは彼女の夫である王晶堯へのインタビューと彼が提供した写真の主たる素材としている。自分の妻が学生によって殺害されたことを聞き知った夫は、すぐさまカメラを準備して、死んだ妻の有様や家族の様子、殺されるに至るまでの一家の境遇などについて写真を撮っていた。本作では、そうした写真が随所に使われている。土屋はこの作品を見て、次のような特徴を認識した。

「第一に、本作は文革の経験者へのインタビューを中心に、当時の写真や文書など、ほかでは見られない資料を使って、客観的に文革時期に起った事件を描写しており、歴史的な価値が高いと思われる。これは、学術的なものも含めて、文革当時の事実を究明したり再評価したりする著作を公開することに規制が多い現今の中国にあつて、参考に値するきわめて貴重な映像である」。「第二に、現今の中国においてインディペンデント・ドキュメンタリーは、人々が歴史を反省する重要な有効なツールとなっていること。歴史を反省し直すということは、新しい社会が築かれていく兆しであり、そこから新しい未来が創出される兆しである。これは、少なくとも現今の中国を理解するためには、非常に重要な要素だと思われる。また、理論や細部にこだわった文字テキストによる歴史叙述より、映像とイン

タビユーを駆使したドキュメンタリーの方が、中国の一般市民にとつては、はるかに説得力や感化力を備えている。したがって、こうした作品がいかなる影響を中国の人々や社会に与えるか、注目に値するのである。「この二点は、この作品に限らず

胡傑氏のほかの作品にも共通していえることである。とくに、中国の政治・社会において忌避感が強い事件である、いわゆる反右派闘争について取り上げた二作『林昭の魂を探して』『国営東風農場』も、その意味で重要性が高いと思われる。「『林昭の魂を探して』は、林昭という一人の女性の人生を、彼女の友人たちへのインタビュと残された文書や写真によって追跡するドキュメンタリーである。林昭は、一九五七年から翌年にかけておこなわれた反右派闘争に疑問を持ったことで右派とされ、地下出版などに関わって投獄された。しかし、獄中でも民主を求め自分の意見を変えず、血書によって自分の主張を記録した末に、一九六八年四月二十九日に監獄で殺害された（『中国の「民間ドキュメンタリー」とは何か——五卓監督へのインタビュ』

「専修大学社会科学研究所月報」二〇一三年四月二〇日号）。

ここで土屋が次のように的確なコメントを付しているのは、さすがである。曰く「『胡傑監督と林昭に関して』日本語で読めるものに、フィリップ・P・パン著、烏賀陽正弘訳『毛沢東は生きている：中国共産党の暴虐と闘う人々のドラマ』（PH P 研究所）がある。ただし、本書が述べる胡傑と林昭の事跡は、

胡傑への取材と当該映画によるところが大部分のようであり、そのほかの資料はソースが示されていないので検証しようがない。叙述は紹介性が強い」。

土屋のキーワードは「民間ドキュメンタリー」（中文「民間記録片」）である。この「民間ドキュメンタリー」が中国社会においてどのようにして生まれ、どのような社会的役割を果たしているか。そしてそれらを素材として研究することは、中国現代史の研究にどのように役立つか。それを考えるために、土屋は胡傑監督へのインタビュを行った。以下、土屋による胡傑インタビュのサワリの部分を紹介する。長々しい引用で恐縮だが、これによって中国「民間ドキュメンタリー」の成長ぶり、それが中国社会を底辺から、まことに遅々たる歩みとはいえ、確実に変えつつある姿を理解できよう。

#### 胡傑監督インタビュより——撮影の動機、契機

土屋 『林昭の魂を探して』を撮り始めたのはどうしてか？

胡 『林昭の魂を探して』もある偶然の機会からでした。友人と飲んでいたら、彼がこういったのです。「うちの母親が、監獄の中で血によって詩歌を綴った同級生がいた、と話していた。彼は、単なる世間話のつもりでしたが、私はその話を聞いてどきっとしたのです。中国の監獄で、血によって詩歌を書いたなんてことは、非常に驚くべき話だ。しかも血で書いたと

いうことは、凡庸な感情の問題ではないに決まっている。必ずや重たい思想的な表現の必要性があつたはずで、表現するすべがないからこそ、血で書いて表現しようとしたのだ。私はその友人に「きみのお母さんのその同級生や友達を紹介してもらえないか？ ドキュメンタリーを撮りたいと思うんだ」と告げました。こんなふうにごく簡単に始まつたのです。しばらくしてから、彼から連絡があつて、彼のお母さんのクラスメートの一人が、ちょうど南京に来たというから、私はインタビュートに出かけました。こうして私は、次第に歴史のなかに入り始め、反右派闘争はもともとどういふものだったのか、ということがわかつてきました。

インタビュートの相手は、場合によっては話そうとしなかつたり、少ししか話さなかつたりという感じでしたが、こうした取材のプロセスで、だんだんとわかつてきたのは、反右派闘争というのは、自分が若い頃に理解していた反右派とは違うものだ、ということでした。私が若い頃は、右派は悪い人だと思つていました。じつは、こうした右派の人たちは、まったく共産党のために、この国をさらに良くしようと思つて意見をいくらか出したら、その結果、右派にされてしまい、たちまち農場にやられて、そこで労働改造を二〇年もさせられ、なかにはそこで死んでしまった人もいたのです。私がいきなり出会つたこのような歴史は、それまで学校で学んだ歴史とはまったく異なるものでし

た。それで、これは重要な問題だと思い、撮影したいと考えました。それは一九九九年のことです、それから撮り始めました。土屋 それまでは歴史の問題を考えることがなかつたのですかね？

胡 考えたことはありませんでした。歴史はとつくに過ぎ去り、もう決まつているから、考えることはない、現在をどうしていくか、ということだけを考えていけばよい、と思つていました。あのときから歴史に入つていったのであり、それまで知つていた歴史というものは、簡単すぎ、不正確なものに満たされていふということを見つけたのです。

土屋 『林昭の魂を探して』の撮影ではどんな障害がありましたか？

胡 最も主たる障害は、撮影を始めると、職場の上司からこういわれたことです。「きみはもうこの職場で働くのにふさわしくない」。それで職場をクビになりました。もともと新華社で働いていたのですが、理由も知らされずに辞めさせられたのです。職場を辞めさせられたのは、私にとって非常に大きな損失でした。しかし当時私は、自分は突然自由になつた、突然好きなだけ撮るべきものを撮る時間ができた、撮ろう、と感じたものです。カネも職場もない、もちろんそれはそれで問題だが、自由になつたと感じたし、自分が向かい合つている問題は、おそらく自分の問題よりずっと重要だと感じられました。その問

題を撮ろうとしただけで、どうして職場を辞めさせられるのか。誰もクビになった理由を教えてくれない。しかし上司は、非常に厳しい感じで、きみはこの仕事にふさわしくないといいました。それでその職場を去ったわけです。

仕事を辞めさせられたあと、自分が成長したことを自覚しました。ある問題を考えるとき、人は成熟し、考え方も複雑になるものです。それまでの芸術家的な感情ばかりではなく、歴史に対して深く研究するようになりました。仕事をクビになつて時間もあるから、全力で歴史を考え撮影する事に没頭しました。撮影していく過程で、それまで全く承知していなかった残酷な事件をたくさん知りました。そして、自分がなぜあの職場で仕事できなくなったか、その原因もわかりました。その原因は、一つや二つではないですが、私とその職場にいたことが、ある上司の昇進に影響する可能性があったのです。だから私を辞めさせれば、みんなそれでよいわけです。

土屋 取材の過程にも障害があったのでは？

胡 語ろうとしない人が多い、これは仕方がないことです。いくらお願いしてもだめでした。なかには核心を握っている人もいました。たとえば弁護士です。彼らにも連絡をとりました。はじめは取材に同意したので、彼らの住む上海に行きました。そして彼らの家のドアを敲くと、開けてくれないのです。別の人を通して連絡してきて、取材に応じたくないといわれました。

だいたいこんな感じですよ。ある人は、私のような若い者が歴史を知ろうとしていること自体を信じない場合もありました。過去のあの社会はまだ残っていて、とくに弁護士のような人は、いまだ恐れの中にいるので、語ろうとしないのです。なかには語ってくれる人もいました。語り始めると非常に興奮し、何日も語り続けるので、私はその人の家に泊めてもらったりしました。

土屋 そうした現象はあなたの映画からもうかがえます。あなたはそうした現象をどうみていますか？

胡 話そうとしないのは仕方ない、理解できません。話しても、もう二度と捕まらないと保証することもできない。彼らが仕事をやめさせられたり、家族に迷惑が及んだりするかもしれない。だから、話してくれる人には非常に敬服しています。多くの人は何年も何十年も、投獄されたり、労働改造させられたりしているのです。それでも話をしてくれる。私はそうした人たちに心から敬服し感謝しています。話そうとしないのも理解できません。

土屋 『林昭の魂を探して』と『国営東風農場』は右派の話として共通していますが、『私が死んでも』は文革の話ですね。

胡 林昭の友達はみんな右派として農場に行かれました。それで、今度は農場の話を取ったのです。彼らの友達は、だいたいい二つの農場に行かれました。一つは東北の新凱湖農場です。

ここはロシアとの国境にあります。もう一つは天津にあり、天津の町から遠く離れた海岸にある茶店農場です。この二つの農場は、当時私がドキュメンタリーを撮ろうとした目的地でした。撮影を始めてから、この二つの農場について取材しました。しかし、うまくいかなかった。取材した人がほとんど話してくれなかったのです。取材できた数量が映画を作るほどにならなかったのです。いまに至るまでできていません。個人個人のインタビューを編集して本人に渡すだけです。私を信じてくれたからこそ取材を受け入れ経歴を話してくれたのですから、個人の話を集めて本人に渡すべきでしょう。しかし、一つの作品としてはできあがらなかった。

その後、雲南の東風農場のことを聞きつけました。そこでは、政治の中心である北京から遠いせい、多くの人が話してくれました。それに、そこの人々は団結していて、いつもいっしょにいて、年も取っているから、しょっちゅう思い出を語り合っていたのです。農場のことを語る本すら出していました。正式な出版ではなく、自分たちで印刷したものです。こうしたことで、私にとっては非常に進めやすかったのです。昆明に行って撮影を終えることができました。

しかも、彼らの農場はほかのところとちよつと違っていました。彼らは記念碑まで作っていたのです。右派分子記念碑ともいべきものです。しかし、「右派記念碑」といったら、右派

運動は重大な歴史的な事件ですから、そこまで大胆にはなれなかった。そこで「右派記念碑」とはいわずに、「鉦山開発記念碑」とよんだのです。その結果、この問題は妙に滑稽なものとなりました。それで、私はこの記念碑の件も映画に撮影しました。それによって、現在の政治的雰囲気が見て取れると思います。

…(略) …  
土屋 この「私が死んでも」の素材は「林昭の魂を探して」の撮影の流れで出会ったのですか？

胡 「林昭の魂を探して」とは関係なく、たまたま出会ったものです。「林昭の魂を探して」を撮ったあと、たくさんの方が私に連絡してきました。そのうちの一部は当時の右派で、家が紅衛兵の攻撃を受けていました。そうした人々が電話をかけてきました。研究者も連絡してきました。中国人の有名な文革研究者の王友琴（一九五二年生れ、七〇〇名近くの文革死者の資料を集め、〇一年に「中国文革受難者紀年園」というホームページ <http://hum.uchicago.edu/faculty/ywang/history/big5/memorial/homepage.htm>）を作った——筆者注）という人です。この人は「文革受難者」という本を書いた。…(略) …彼は、中国の優秀な学者でしたが、アメリカに行ってしまったのです。彼が、私の「林昭の魂を探して」を見て、よく撮れている思い、どうして文革ものを撮らないのかといったのです。そして彼の

本を送ってきたので、その本を見たら、文革のことが非常に詳しく出ている。文革について、私たちはよく知っているはずで  
す。私などはこの一〇年に育ちました。ちょうど小学校から高  
校卒業までの一〇年にあたります。上述のような暴力事件もた  
くさん目にしました。しかし、どういう題材をどう探して撮影  
するか、これは大切なことです。

じつは、教師が殺された事件はほかに二つ撮りました。一つ  
は南京です。この教師は南京師範大学の共産党委員会副書記で  
した。夫婦二人とも殺されました。もう一つは、夫が江蘇省教  
育庁長だった人です。彼が殺された時期は北京の事件より二日  
早く、八月三日に殺されました。しかも省レベルの指導者が紅  
衛兵に殺されたものです。私はその件を撮って、撮り終えまし  
た。しかし、その家の人々が、他人にそれを見せたくないため、  
現在に至るまで、撮り終えたけれども、編集を終えていません。  
この家庭はそのあと、もう映画のことをやりたくなくなつたの  
です。自分の子供に影響があると恐れています。『私が死んでも』  
の場合、撮り終えたあと、殺された教師の夫である彼は、決意  
が固かった。この映画を必ず完成させ、上映して、みんなに見  
せろと私にいったのです。

(原載「中国の『民間ドキュメンタリー』とはなにか——胡  
傑監督へのインタビュー」『専修大学社会科学研究所月報』  
二〇一三年四月二〇日号。以下で全文を読むことができる。

<http://www.senshu-u.ac.jp/~of11009/PDF/snr598.pdf>

#### 胡傑監督インタビューを読み終えて

私は旧著『文化大革命』で、巴金の「文革博物館」構想を紹  
介し、黎波の「文革学」提唱を紹介した(二〇二〇三頁)。  
あれから四半世紀、私自身は市場経済化への道を急ぐ中国を  
フォローすることに忙しく、大躍進・文革期の悲劇を顧みる暇  
はなかった。今回、土屋教授グループ企画のいくつかに参加し  
て、文革前史としての右派問題、『星火』グループが提起した  
飢餓と社会主義の夢、そして文革期の悲劇の一端を垣間見て、  
知識の欠落を補うことができた。錢理群(一九三九生、北京大  
学教授、現代文学史専攻)のコメントを借りて、結びとしたい。  
「もし林昭と『星火』グループの活動がなかったら、我が民族  
の魂を救うことはできなかつたであろう。彼らこそが魯迅のい  
う『筋骨』であり、『背骨』なのだ」(『求索——蘭州大学「右  
派反革命集团案」紀実」錢理群序文)。つまり、『星火』グルー  
プの言論は、その正しさと鋭さにおいて、中国共産党治下の知  
識人のあらゆる反抗を超える、ということなのである。

【筆者追記】土屋教授の「胡傑監督『星火』初探」は『専修  
大学社会科学研究所月報』二〇一五年五月二〇日号(近刊)に  
掲載される由である。前掲の専修大学サイトを参照願いたい。